小池辰雄著作集　第２巻『芸術のたましい』

聖書より見たるゲーテの『ファウスト』

永遠の女性（第二部第五幕）

ゲーテの大作『ファウスト』の結句が

“ -

 ”

「永遠の女性

我らを引きあぐ」（12110～12111）（私訳）

をもって結ばれていることは、彼の全生涯の告白としてもこれ以外のものが考えられないほど、彼の実存の本質を告白してのない名句である。

周知の如く、彼の生涯には、彼の心魂をそれぞれの時期において進展させ、詩作の泉たる役割を果した女性たちが、玉のの珠玉のように連なっている。しかしそのような一連の女性たち（weibliche Gestalten）の第一に立つ女性は誰であろうか。フリーデリケかロッテか、リリーかフラウ・フォン・シュタインか、妻となったクリスティーネか、『ディーヴァン』のマリアンネか、それとも最後の恋人ウルリーケか。彼の恋人たちの中でも以上の七つ星の如き七人は決定的な役割を演じた女性たちではあったが、根源的な要素を彼の中に植えつけたものは、実に といって敬愛された彼の母カタリーナ（Katharina）であった。

彼の母は太陽のような「陽気な性格」と「創作のよろこび」をゲーテの存在に血と共にちあたえた。彼女自身の次の告白は、何ものよりも母の本質を語っている。

「階級も年齢も性別も問題でなく、どのような人も私のもとから不満をもって去ったことがないという恩寵を私は神様からいただいております。私は人を本当に愛しております。そのことは老若を問わず感じていましょう。私は別に求めるところなく世を暮します。それでどんな男のひとにも女のひとにも快く思われるわけです。誰れに対しても道徳的な批判はいたしません。いつもその人の善い面を見るようにつとめ、悪い面は、人間を形成し、角をけずりおとすことを最もよく御存じの方（である神様）にお任せします。こういった生き方で私は楽しく幸福に暮しています。」

実にゲーテの母自身が太陽のような性格であった。この告白の中には神的な明るさがある。この母の如く、パリサイ根性のもない、どんな人をもその善い面に即して愛してゆく心は、いわゆる宗派的な宗教心よりもはるかに高くはるかに広い心である。それは、イエスが

「天の父はしき者の上にも善き者の上にもその太陽を昇らせ、正しき者にも正しからぬ者にも、雨を降らせなさる。だからおまえたちの天の父のきようにおまえたちも全くあれよ」（マタイ5･48）

と言った神的完全性に通ずる心である。

母の心魂に宿っていたこのような神的な愛の完全性こそ、ゲーテの存在の最も本質的なもの、いわば原始核（Urkern）の形成に重要な要素となったことは疑いないところである。「永遠の女性」という日本語は、永遠的な女性的人格を意味するようにひびくが、その意味でゲーテの母は永遠の女性の名にふさわしい人格であった。 -という表現は、訳しがたいもので、「永遠」が小文字でなく大文字であるので、これはdas Weiblicheに対して単なる副詞でもなければ単なる形容詞でもない。11603行の 如く一語的にdas Ewigweiblicheとしてもよろしかるべく、真に女性的なものは必然永遠的なものである、といった意で、「永遠なる女性（にょしょう）」とでも訳したらいいのであろう（相良守峯訳参照）。多少耳れないので、「永遠の女性」と訳しておいたが、この「女性」は必ずある女性的人格を背景にもつ「女性的なもの」という意味で人格をはなれての単なる女性的なものではない。直訳すれば「永遠的＝女性的なもの」である。そしてそういった永遠性をもった女性的なものにも種々あるから、ゲーテに出会った一連の女性たちは、夫々の女性的永遠的なものをもってゲーテをひき昇らせたわけである。

母カタリーナにおける永遠的女性は正に愛であった。それが、ゲーテのたましいの中では男性的な情熱（Leidenschaft）に変貌（メタモルフォーゼ）をなして宿っていた。それゆえに、彼の愛は恋人に先んじて存在し、彼の恋人となる女性に出会えば、情熱の炎を発したわけであろう。また彼自身が女性に愛せられるものを備えていた。不滅の炎としての愛そのものがゲーテの存在の中心に燃えていた。それは現実に恋人を有たずしては在り得ず、恋人においてその恋人の特質を極限的に恋して進む創造的な愛であった。

彼の人格の中心に燃えていた愛は実にそのような生命的なものであり、創造的なものであった。それは生涯を通して恋愛の衝動として燃え貫き、創作の動力として活動し続けた。この太陽の如き情熱、豊かな情感は、強靭な意志力や豊富な知性と相って有機体的な構成をなして、天才ゲーテの多角多彩な発展、展開の血脈をなし、ミクロコスモス的な、あらゆるものを内包しているような実存の心臓となり、文学作品はもとより、百科的著作や日記や書翰の光源ともなり生命のともなって作用している。

そして彼が母において彼の深層意識で体感していた「永遠の女性」を、彼は『ゲッツ』の妻エリーザベツや『ヘルマン』の母において表現していることもよくできるところである。

母から受け継いだこのような愛の酵素、愛の原始核が、人間ゲーテの生長発展と共に必然要求したものが、恋人であり、追求してやまなかったものが、真理の具象たる大自然であり、また神的実在であった。そしてこの女性（Weibliche Gestalten）と天然（Natur）と神性（Gottheit）の三相はゲーテにとってばらばらな対象ではなく、相関し相入しつつ、彼の実存に不可欠のものであるところに、「女性たるもの」（das Weibliche）が「永遠性」（Ewigkeit）をもち得る消息があり、「永遠なる女性」（das Ewig-Weibliche）というものが、人間ゲーテの、そして人間一般の根本問題に関わる重要性をもつがある。

ゲーテの生涯をって、少年時代のグレートヘンへの初恋から、『マリーエンバードの哀歌』の源泉となった最後の恋人ウルリーケに至るまでの恋愛体験をここに辿るわけにはいかないが、主な女性だけでも十指にあまる女性たちにおいて、彼が体験したものは、それらの女性たちとのぶつかりで、エロス的な情熱を契機や要素としながらも、エロスの淵に落ちこむ危機がときにはあったにせよ、それらの体験要素を天然の中に溶けこませ、神的なものへと昇華させてゆくのであった。しかもそこに体感される神的なもの（das Göttliche）は、神性（Gottheit）は、決して観念的なものではなく、そこにはアガペー的な恩恵の愛や献身の愛がエロス的なの愛と交流する消息が生ずるのである。

「いかなる愛も、エロスとアガペーの合一がないならば、本当の愛ではない。エロスのないアガペーは道徳律への屈従であり、それはあたたかみもなく、あこがれもなく、再び結合する余地もない。アガペーのないエロスは混沌たる欲求で、自主的に愛しまた愛されるべき個としての他者の権利をないがしろにする

と神学者パウル・ティリヒは言っているが、ゲーテの「永遠の女性」das Ewig-Weiblicheの内実たる愛は正にエロスとアガペー両者の融合したものである。ゲーテが熱烈な恋愛の対象とし、 相手とした女性には、夫々何らかの意味で永遠的なものが存した。それが美的なものであろうと（リリー）、的なものであろうと（シャルロッテ・フオン・シュタイン）、天真な肉体的なものであろうと（クリスティーネ・ヴルピウス）、美徳的なものであろうと（ロッテ）、詩情的なものであろうと（マリアンネ）、心情的なものであろうと（フリーデリケ）、幻想的なものであろうと（べッティーナ）、憧憬的哀歌的なものであろうと（ウルリーケ）。永遠的とは単に時限的なものに対する無時限的永続を意味するのではなく、質的に不滅なものを意味する。うつろいゆくものの中に質的にうつろわぬものを観るのがゲーテの眼であった。そこに深い宗教的なもの、神的なものが観られまた感ぜられる。しかもそれは超絶的霊的な飛躍においてではなく、どこまでも現実そのものに於て、現実の奥の世界に接するたちの事態である。

「ゲーテは彼の豊かな生活のあらゆる時期において、さまざまな種類の女性と親しい交りをしたことを貴いものと評価してきた。彼はその精神（霊）的創造に対する最も精細な刺激とそのしばしば暴風のように襲う激情の最も崇高な浄化作用を女性たちから受けると信じた。女性たちと近く接していると、彼の本然の性格の最も善い面がはじめて開現してくるように思われた。この詩人は女性たるものの現実によって自己及び世間というものから絶えず超脱せしめられた。女性というものを満喫するとき、女性を通して彼は至高者の最も美しい霊感を受けるのであった

とツヴィッカーが言う通りである。

「愛感あふるる創造力はゲーテにとってあらゆる芸術的創作の内的推進力である。この観念は芸術的作品の成立を宗教の領域におくことである。すなわち、作品がこの芸術家の魂の中から生ずることは、あだかも宇宙が、一切を形成し、一切を包摂する神の愛の生命的根源から生ずるが如きである。この創造的芸術家の生産は大自然の生産力にたとえられる。──それはギリシャ的エロスの概念からは解放されがたい相ではあるが──同時にまたキリスト教的色調の愛の思想と、またこの愛の思想によって父なる神の相とも連関せしめられている。

と語っているシェーダーの言も適切である。

さてわれわれは第五幕の転回点（Wendepunkt）であり、またファウスト劇における賭の焦点（Brennpunkt）である瞬間を考察してみよう。

「そうだ、おれはこの精神に一身をささげる。

智慧の最後の結論はこういうことになる、

自由も生活も、日毎にこれをい取ってこそ、これを享受することに価する人間といえるのだ、と。

従って、ここでは子供も大人も老人も、

危険にとりまかれながら、有為な年月を送るのだ。

おれもそのような群衆をながめ、

自由な土地に自由な民と共に住みたい。そうなったら、瞬間に向ってこう呼びかけてもよかろう、留まれ、お前はいかにも美しいと。

この世におけるおれの生涯の痕跡は、

幾千代を経ても滅びはすまい。──このような高い幸福を予感しながら、おれはいま最高の瞬間を味わうのだ。」

（ファウスト、うしろに倒れる。死霊たちが彼を抱きとめて、地面に横たえる）

 （11573～11586）（相良守峯訳）

生活の最高の智慧は、自由も生活も日毎にこれを戦い取るにあると。これはイエスのあの有名な聖句の精神と相通ずるものである。すなわち、

「この故にのことを思い煩うな。明日は明日自ら思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり」（マタイ6･34）

一日一日を全力を尽くして戦いとることは、一日を一生として生きることである。それは最早、人生の時間的長短の問題ではなく、瞬間瞬間に全生命を托し、全存在を「賭」けて生きるか否かの質的問題である。ここに瞬間において永遠をつかみ、瞬間をして永遠たらしむる生き方の秘訣がある。ペテロの

「一日は千年の如く、千年は一日の如し」（第二ペテロ3･8）

も同じ消息である。

「私は現在というものに賭けた、それはあたかも一つのカルタに大金を賭ける人の如くであった。そして、現在を誇張なしにできるだけ高めるように努力した。」

これはあの『マリーエンバードの哀歌』の詩作に関する告白の一節であるが（１８２３年１１月１６日のゲーテの言）、何もこの一事に限らない。ゲーテは現在、現実、瞬間を生きんとして全生命をこれに傾けて生きた人であった。ということは永遠を現実として生きようとしたということである。

であるから、ゲーテ＝ファウストは表面上賭けに負けたように見えても、内面的、本質的には、メフィストに勝ってしまった。パウロが

「は殺し、霊は活かす」（第二コリント3･6）

すなわち

“ , .”(Ⅱ.Kor.3:6)

と言ったように、メフィストは

「まあ止まってくれ、お前は本当に美しい」

を儀文化し、ファウストは霊化した。即ちいつわりや、たばかりや、たくらみや、でまかせを特技とするメフィストは、この言葉に執して、却って敗北し、ファウストは額面上は一応メフィストの掌中に陥って死を受けとりつつも、恵み深い別の霊の助けによって、地上における存在からの突破と真の発展、上昇の経路を進み往くこととなった。ゲーテ自身の『ディーヴァン』の中の言、

「死して、成れ！」（私訳）（’ !）

はここにも真理として実証されている。ファウストの諸々の罪過は、単に過去のものとして葬られはしない。彼も勿論、罪過の果としての「死」を受けとらねばならない。そこには宗教的回心（メタノイア）の消息が欠けてはいるが、全存在をもって現在を現実的に生きようと努力して来た彼のたましいは、既に質的に永遠をある程度呼吸していたから、死と共に解消したり破滅したりしない。それでは自然界乃至霊界の法則にあわない。

「時計は止まった──

　　止まった。真夜中のように黙っている。

針が落ちた。

　　針が落ちた。事は終った。」（11593～11594）

「時計は止まった、針が落ちた」とは面白い。ファウストは死の関門を越えて、時限の世界から永遠の世界に突入した。もはや時計は要らない。時刻を指す針も無要である。「事は終った」とメフィストはうそぶいたが、それは永遠的行為を性格としていたファウストにとって、序曲が終ったことになる。これからが天界の遊行楽為の世界である。

「事は終った」（ ）（ヨハネ19･30）

とメフィストはイエスの十字架上の言をりて、自分がファウストをひっぱり廻した仕事は終った、これで自分の勝利だといたわけであるが、それは身勝手な判断で、メフィストのわるだくみの仕事こそ「過ぎ去った」（es ist vorbei）に過ぎないファウストの創造的な意欲から発した行為、即ち民福のため新開地を作り、理想的な国土建設をはかった行為は、中道で挫折しようとも、それはファウストにとっては「過ぎ去った」のではなく、永遠的な質の行為として留まる。非連続をもってこの精神を受けつぐ後継者を約束するものである。ところがメフィストには、そういう「永遠の創造」（das ewige Schaffen）の意味がわからない。彼は否定と破壊の霊として「永遠の虚無」（das Ewigleere）このむ。それは彼の本質であるからである。この語は世界と人生の現象面の「過ぎゆく」相を観じて嘆じた旧約聖書の『伝道の書』の言を連想させる。

「の空、空の空なるかな、すべて空なり……嗚呼、皆空にして風を捕うるが如し。」

ゲーテもおそらくこの『伝道の書』第１章を念頭にして「永遠の虚無」という霊を作ったのであろう。誰か、時あってか諸行無常を感じないことがあろうか。しかし消え去り、過ぎゆく現象でありながら、消え去って消え去らぬもの、過ぎゆきて過ぎゆかぬものがある。そこに質的なものの把握の重要性がある。

第五幕のはじめに登場するフィレモンと老婆バウツィスは、「旅人」にとっては、かつて

「半死半生の人間の口に、甲斐甲斐しく元気づく物を飲ませた」（11067～11068）

善行の夫妻、それはあの「憐れみ深いサマリア人」（ルカ10･30～37）のような人柄であった。この老夫婦は、ファウストの開発事業の真の犠牲となって、住家もろとも焼死してしまった。しかしこの老夫妻の存在と善行は火と共に焼け崩れはしない。一方ファウストのこの老夫妻の住居に対する仕打ちは、彼の意志でなかったにせよ、彼のグレートヘンに関わる幾重の罪過と共に、メフィストに利用されたり、誘惑されたりして生じた致死罪の最後的なものとして、やはりぬぐうべからざる罪過であった。回心のないたましいには「憂愁」（Sorge）が最後までつきまとった。そしてこの「憂愁」が吹きかけた気息のためにファウストは失明したのであった。

にも拘らず、ファウストが天界へ救いあげられてゆくのものは何であるか。グレートヘンを焦点とする罪のゆるしの恩寵にあずかった女性たちの愛の力である。ゲーテ＝ファウストはいわゆる信仰の人ではない。しかしゲーテ＝ファウストは、ひたすら全存在をもって多種多様なことを全一的に欲求してやまず、そのようにして全宇宙的なたましいたらんと追求してやまず、しかも他面、人間の限界をわきまえ、全存在をもって調和と諦念における完成を求めていた人物である。そして最後には人類的福祉を念願しての事業に努力して仆れた。そして彼のハートは根源的に愛そのものであり、且つ愛する対象なくしては在り得ぬものであった。ゲーテも、どのような善行も、それで直ちに天国をかち得るとは思っていない。しかし、全存在で追求する者が地獄におちるとは考えもしない。彼は活動的にして追求的な愛の魂が、地上の生涯の果てるところで次の次元の世界に突破突入するものであることを大胆に確信している。

「我々の存在が持続するという確信は、私にとっては活動の概念から生ずる。というのは、もし私が私の生涯の終りまで活動するなら、存在の現在の形態が私の魂に対してこれ以上持ちこたえ得なくなった場合、自然は私に存在の別な形態を提示する義務がある。」（１８２９年２月４日）

という有名な言の如く。

若きゲーテに全幅の愛を傾け、ついに独身を貫いた純情のフリーデリケがモティーフの中核となっている第一部の女主人公グレートヘンは天界から、その後のファウストを看護り、今や第二部第五幕のフィナーレにおいて再び現われようとする。ゲーテのフリーデリケに対する罪責感と真情がゆかしくも貫かれていることを見なければならない。女性の外的特色を美となし、内的特質を愛とするなら、リリー＝ヘレナは美的引力としてゲーテ＝ファウストを地の果てまで引きつけ、フリーデリケ＝グレートヘンはゲーテ＝ファウストを天の極みまで引きあげてゆく。彼ゲーテが若き日に体験した恋愛の化身的総括として具象化されているグレートヘンの愛の力、「永遠の女性」としての愛の力が、その後の女性たちとの恋愛体験も加わって、第二部のゲーテ＝ファウストの諸活動のかくれた原動力としてはたらき、その広義の贖罪的な執り成しと共にファウストを天界へひきあげてゆくこととなる。それは、カトリック信条によるのでもなければ、プロテスタント信仰によるのでもない。ファウストは全存在的な在り方で行為的にぶつかってゆく永遠の男性であり、グレートヘンは祈り心の純愛の化体として永遠の女性である。そのような永遠に男性的なものと永遠に女性的なものとの時空を越えて火花する現実は、それ自体永遠的な現実として、相対界を突破して永遠界を逆に時空の中に現じゆく。そこにファウストが天界に昇らしめられる必然性がある。

そのようなファウストのたましいはエンテレヒーといわれるにふさわしい。 は「おのが目的を自分自身の中に具有するもの」という意味あいをもつ。ギリシャ語の（= en+telei+echein）はすなわち具足円現の意がもとで、不断の活動、作用という意味ももっている。

「眼が太陽のようでないならば、太陽を見ることは決して出来ないであろう。我らのうちに神の本来の力がないならば、どうして神的なものに恍惚たり得るであろう」

とはゲーテの有名な詩句であるが、そのようにゲーテは神的なものを本来具有しているのが、真の人間であると信じていた。これは人間が本来神の似姿 として創造されたという聖書の神話（創世記1･27）の神学的意味と相通う。ただゲーテにおいては、原罪とか、楽園喪失とかが、決定的に否定的ではないまでである。ところで彼が宗教形態に四種を考え、上なるものへの畏敬、おのれと同等なるものへの畏敬、下なるものへの畏敬、そして最後に本然の自己への畏敬となして、これを最終的な形態としたことは周知の通りであるが、それは神、自然、本然の自己を神的なものの一貫したものとして直接背定をなすところからくる必然的帰結である。ではあっても彼の思惟は決して論理的整合をゆるさぬもので、罪を罪としてみとめるにも決しておろそかではない。彼の認識はすべて言の最も深い且つ広い意味で最も即物的、現実的であって、観念的、信条的、教理的、先験的ではない。現実的で詩的な、象徴的な、また劇的な把握である。矛盾や比喩や緊張関係を大きく内包している調和の人生観、世界観、宇宙観、神観である。存在そのものを直観、直視し、内観、体感する把握である。

「エンテレヒーは永遠の一断片であって、地的な肉体と結合している僅かな歳月の間に古くはならない。……有らゆる天才的人物においてのように、エンテレヒーが旺盛である場合には、肉体にしてこれを活かす際に、ただにその組織に作用してこれを強め且つ崇高なものにするばかりでなく、また其の精神的優勢のために永遠の若さという特権を行使せんと努めるだろう」

とゲーテは語っている（１８２８・３・１１）。

そのような性格と天資をもち、もろもろの体験を通して大肯定の気宇をもって生き抜いてきたゲーテ＝ファウストは絶対次元の世界からの愛の力にひきあげられてゆく可能性と必然性をもった存在である。天使がうたう歌詞の中に、

［独文省略］

「罪びとをゆるし、

塵あくたを活かさんがため。」（11679～11680）（私訳）

という句がまず出ているのを見ても、ファウストが救済を必要とし、また救済されるのぞみあるたましいであることがうかがわれる。ファウストの「不滅なるもの」エンテレヒーは地的なものからして上昇するが、それが霊化されるにはなお時間を要した。彼を

「地上から解きはなしながら、救済する愛はまず段階的にファウストを浄め、かくてついに純粋な天的容相にするのである

とシュピンナーも言っている。

更に天使の合唱の中の次の二行は不滅のひびきをもっている。

［独文省略］「愛のみぞ、愛の人をば

この方へ導き入るる。」（11751～11752）（私訳）

義は神的な意志の貫く力、愛は神的な生命のひきよせる力、この義とこの愛とは不可分のものである。罪を罰しつつゆるし、塵の如き人間を殺しつつらせる。そのような義、そのような愛、しかもそれを一語で表現せんとすれば、贖罪愛というよりほかに語がない。そのようなわけで、ファウストの霊は浄罪の実に包まれ、浄福を約束される。

［独文省略］

「浄界へ向かえ

愛のよ！

おのが罪を呪う者を

救え、真理よ。

悪より救われて

彼らよろこび、

みなもろともに

浄福をうけんがために。」（11801～11808）（私訳）

聖なる霊火に囲まれ、ファウストの魂は霊気を吸って息づく。

［独文省略］

「聖なる熱火よ！この火に囲まるる者はいのちに在りて幸を覚えんよき人々と共に。みな相共にちてえよ！大気は浄められぬ、霊よ、息づけ。」（11817～11824）（私訳）

このようにしてファウストの魂は浄化され、昇天の備えが成ったので、天使がファウストの「不滅なるもの」“”──ゲーテはこれをはじめ“”と記した──を運びゆく。すなわち天使たちの執り成しの祈りの合唱で、ファウストの霊は聖なる霊火に浄化されつつ昇ってゆく。しばしばメフィストの術中に陥っては罪過を幾たびか犯したファウストヘの救済の天意を、聖書の言をもって裏書きして見るならば、

「われ（神）こそ我自らのゆえによって汝の不義を消し、汝の罪を心にとめざるなれ」（イザヤ43･25）

の大悲である。霊火に浄化されつつ、

「火の中をゆくときかるることなく、もまた燃えつかじ」（イザヤ43･2）

という事態である。

詩人ゲーテは天界、霊界において何に心を躍らせているか、それは霊界を貫く白熱の愛の光である。たたみかけてひびいてくる天界の歌声はすべて愛の讃歌である。天空は愛の光と力と生命に貫かれ、満ちあふれるが如くである。

［独文省略］

「なる法悦の焰灼熱する愛のきづな煮えかえる胸の痛み、泡立つ神の悦楽。よ、われを貫け、槍よ、われらを突き刺せ、よ、われらを打砕け、雷火よ、われに落ちかかれ、ありて甲斐なきものをすべて飛びけしめなる愛の核心たるの星を輝かしめんがため。」（11854～11865）（相良守峯訳）

天界にかかる愛の星は、キリスト教的に解すれば、「曙の明星」（黙示22･16）をもって象徴されるキリストであるし、ギリシャ的に解すれば、宵の明星において神話化されている女神ヴィーナスである。いずれをも自由に連想して可なるべき愛そのもの。ゲーテにおいてはアガペーたる愛もエロスたる愛も観念的に線がひかるべきものではなく、現実的にはどちらをもふくみ、時と場合に応じていずれかが主動的となる自由さをもっている。その際全人的熱誠が中核の炎である限り、そこに永遠に人間的なるもの - があり、神性に通ずるものである。エロス的愛には罪への危機性はあるが、直ちに罪性をもっているわけではない。ここにうたわれている愛の法悦においても、そのような危機性があればこそ、聖愛の貫きを悲願しているのである。詩人は更に「全能の愛」をうたって

［独文省略］「かくてこそ全能の愛である。一切を造り一切を育くむのは。」（11872～11873）

宇宙の中心的原動力は全能者の「全能なる愛」にありと喝破した。これは全くダンテの『神曲』と軌を同じうしている。ゲーテとダンテとはその恋愛体験の相において西と東の如くちがいながら、ある共通の焦点をもっていると思われる。それについてはここにするいとまがない。が、ゲーテのいう - 永遠の女性が両者を夫々の相において引きあげいたことにおいては同質である。愛こそは魂の最も大切な、死活に関わる養分である。万人は実は愛に最も飢え渇いているのである。愛を吸い愛を喰わぬ霊は枯死する。

［独文省略］

「それが自由な大気の中にあるところの

霊たちの養分なのだし、また、

遂には天の至福としてけてゆくべき

永遠の愛の啓示なのだから。」（11922～11925）（相良守峯訳）

地上で恋愛を通して愛を養分として生きていたファウストは、天上で浄化されたその愛を更に養分として永遠の生をける。それはとりもなおさずゲーテの悲願であった。地界で“ ”自然の乳房から生命を享けていたファウストは、今や天界で永遠の乳房から霊生を享けようとする。さて次の有名な詩句が、ゲーテ自身も言うようにファウスト救済の鍵を暗示する。

［独文省略］

「霊界の気高い人間が悪から救われました。絶えず努め励むものをわれらは救うことができる。それにこの人には天上の愛が加わっているのです。祝福された人々の群が歓んでこの人を迎えるでしょう。」（11934～11940）（相良守峯訳）

「絶えず努め励む者」、何に向かってか。よろずのことにおいて、またよろずのことを通して、究極のものに向かって。究極のものとは何であろう。キリストは

「まず神の国と神の義を求めよ」（マタイ6･33）

といった。パウロは

「愛を追求せよ」（第一コリント14･1）

といった。そしてキリストはまたいった

「求めよ、さらば与えられん」（マタイ7･7）

と。人間界に愛を、自然界に真理を、天界に神的なものを追求してやまぬファウストの、善意をもって人のため世のため尽くさんとする行為 。そに人生の目的を見て「努め励んだ」このたましいは、躓いても、転んでも、迷っても、過誤を犯しても、なやんでも、苦しんでも、泣いても、叫んでも、とにかく全存在をもって実存的に追求してやまなかった。ゲーテ＝ファウストはいわゆる信仰者ではない。しかし彼のいつわりなく、すべてにぶつかってゆき、瞬間に全生命を賭けるたちの在り方は、神の愛に顧みられる。ゲーテ＝ファウストに接し、特に彼のたましいを愛した人の祈りと愛とが執り成して彼を天界へとひきあげる。

［独文省略］

愛の力は何ものよりも強い。霊的人物たちの世界の崇高な一員たるファウストは、地上にあったときも天上に迎えられてからも、「悪」（das Böse）からも、悪の権化たるサタン（der Böse）からも救われねばならない。天上の愛、これのみが一切の悪から、善意をもって努力精進する者を贖う。ファウストも神の眼の前には惨憺たる一個の人間である。しかしまた神の似すがたをともかくも宿している神の子としての人間である。前の見方はより強くプロテスタント的であり、後の見方はより強くカトリック的である。ゲーテはいわゆるプロテスタントでもカトリックでもない。その両面をゲーテらしき自由において有っている。神の愛、それが母の乳房に宿っていた愛であろうと、或は聖母マリアに権化した愛であろうと（12093～12094）、グレートヘンに結晶していた愛であろうと（12069～12075、12084～12093）、マグダレーナにおいて香油として象徴された愛であろうと（12037～12044）、サマリアの女において泉と迸った愛であろうと（12045～12052）、エジプトの聖女マリアの精進から発する祈りの愛であろうと（12053～12060）、永遠の愛としてファウスト昇天の直接または間接の執り成しの力となる。ファウストはこのような愛の翼にたましいを托して昇りゆく。「永遠に女性なるもの」または「永遠の女性」とは、究極的には実に女性というすがたをとった愛そのものである。

「神の愛によって最美の生に高揚させられた性格をもった人間の証明としての女性、そのようにゲーデは彼の永い生涯で彼の視界に入って来たすべての崇高な女性像を体験した

とラーベも述べている。

ゲーテは詩の上では単なるプロテスタンティスムスをも、単なるカトリツィスムスをも問題としていない。厳密な十字架的贖罪愛でもなく、明確なマリア崇拝というわけでもない。象徴的に用いられているに過ぎない。このことはエムリヒも次のように述べている。

「天上からの恩恵はゲーテにおいては厳密な意味でキリスト教的ではない。何となれば恩恵が罪なる自我の変革や滅私の上にも、神的な救主への信頼の上にも基礎づけられていないからである

と。贖罪愛の契機も、マリア崇拝の様式も、この第五幕の「山峡、森林、岩石、曠野」の場にふくまれてはいるが、そのようなプロテスタント的、カトリック的なものをふくめ、且つ超えていつわりなき自由な人間としてのゲーテ＝ファウストのの相と、神の無条件的な赦しとを祈求する「永遠の女性」の相が──それは特にグレートヘンに結晶している「愛」の相として──現われている。この愛のみがファウストのエンテレヒー的元素を朽つべき地的なものから分離させる。

［独文省略］

「剛毅な精神の力が

諸々の元素を

わが身に掻集めていると、密接な霊と肉との

合一した二重体を

どんな天使も分ち得ません。

永遠の愛だけが引離すことができるのです。」（11958～11965）（相良守峯訳）

生きとし生ける万象の間で最も力強いものは愛の引力である。そしてその愛の根源は神である。愛は限りなく自己を与える愛において至高のものである。限りなく自己を与える者は自らが無限の霊生を宿す者でなければならない。これは神のみがなし得、その霊生を無条件に絶対的に受けたのがキリスト・イエスであった。だからキリストのみが無限の愛、無量の生を与えることができる。この愛がアガペーであり、アガペー的愛の源泉である。かかる神的な愛が人間の罪という癌よりも厄介な事態にぶつかって、これを贖うために生じた自己提供の極致が十字架の贖罪愛（絶対恩寵）である。これのみがたましいを解放し、自由となし、心身の一切の病根を根絶せしめるのである。そして聖霊を注いで霊生に甦らせる。それが真の浄化、聖化作用である。このような贖罪と霊生化の愛のみが最強の愛で、一切を引きよせる力をもち、一切をいあげる力をもち、一切に生命を与える力をもっている。これのみが永遠の愛の実相である。このようなキリストの福音の根源の相を知らないゲーテではない。ただゲーテはこういう告白をしないで、むしろルカ福音書第15章のイエスが語った「放蕩息子」の譬話の如く、十字架をも語らぬ父の絶対の角度から把握し、告白する。

さきにもちょっと触れたように、聖母マリアの前に三人の女性があらわれてグレートヘンのため執り成しの祈りをする。第一に「罪深き女」といわれるルカ福音書第７章の「女」が祈る。彼女はしかし事実キリスト・イエスの前に悔改の心を告白し、イエスの足に涙をこぼし、頭髪でこれをぬぐい、イエスの足に接吻し、香油を足に塗った女性である。イエスはその砕けた心と、その純愛をして、無条件にこれをゆるした。この女はマグダラのマリアであったかも知れない。第二の女は、「サマリアの女」で、イエスがサマリアを旅してヤコブの井泉に立ちよったとき、水をくみに来あわせた女である。その劇的な光景はヨハネ福音書第４章にらかである。彼女は自分の素性をイエスに看破されて驚いたが、イエスが彼女に「永遠の生命の水」を自分はもっていると言っても、彼女にそれがわかるはずはなかった。これは聖霊のことであった。第三の女は「エジプトのマリア」で、これはカトリックのな聖徒伝の中に出てくる人物で、肉情の生活の罪ほろぼしのため、四十八年の生活を送ったといわれる女性である。以上三人の女性はいずれも肉情の罪過から救われた聖女として、同じ罪過を犯したグレートヘンのため、グレートヘンがかつて祈ったマリアに執り成しの祈願をなすのは自然であろう。しかし本来はキリストに罪のゆるしを願うはずである。十字架の愛のほかに贖罪の実力はないからである。ともかくどのような罪でも、モーゼの十誡が示し、且つイエスの「山上の垂訓」において、モーゼの十誡の根本精神が掘りさげられているイエスの言に照破されるならば、どのような罪でも、自分でこれを根絶し得るものでないことは、ゲーテがここで、肉情についていっている詩句に照しても自明である。

［独文省略］

「誰が自力で断ち切れましょう

肉情の連鎖を。」（12026～12027）

宗教が観念である限り、それは空念仏とひとしい。天来の諸力の実力なくしてたましいの問題はどうにもならない。祈りの様式がカトリック的であるにせよ、或はプロテスタント的であるにせよ、問題はここでも名ではなく実にある。それゆえにここで注目すべき点は、純情なグレートヘンが誘惑に負けて、

「唯一度自分を忘れただけで、わが身の過ちにすら気づかなかったこのよい魂」（12065～12067）

のためにも、その結果が重大な諸犯罪を招来したので、三人の悔改の女性が心を合わせて執り成しの祈りを捧げているということである。またグレートヘンも浄罪されて昇りくるファウストのため、執り成して、栄光の世界を目むことなく昇りゆくように祈願する（12088～12093）。昇りゆくファウストの栄化されゆくすがたにゲーテ自身の悲願がこもっている。

［独文省略］

「ごらんなさいまし。この方はあらゆる地上の絆を、古い殼をかなぐり捨て、霊気の衣のなかから、最初の若々しい力が現われてきます。」（12088～12091）（相良守峯訳）

すると「栄光の聖母」（Mater gloriosa）がグレートヘンを励まして、ファウストをひきあげる者となるようにあたたかく告げる（12094～12095）。かくて聖母を中心として、グレートヘンを筆頭に、悔改の女性たちが、ファウストをして、栄光の天界を、エンテレヒー的存在にふさわしい霊界をひたすら昇らしめる。

かくて最後に有名な一連の句が全篇の結論として掲げられる。

［独文省略］

**神秘の合唱**

「過ぎゆくものはなべて

映像にすぎず。

満ち足らざりしもの

ここに円現し、名状しがたきもの

ここに成就せり。

永遠の女性

われらを引きあぐ。」（12104～12111）（私訳）

この「神秘の合唱」が唱道する現実は天界の現実である。キリストの示した「主の祈り」の中に、

「の天に成る如く、地にも成らせたまえ！」（マタイ6･10）

というのがある。この一句は「主の祈り」 の中心の言である。すなわち天界、霊界においては、神意がそのまま天的な自由と必然において成ってゆく。それがここにゲーテがうたっている天的現実である。そのような天的現実を可能ならしめるものは霊界に遍満する神の愛の実力である。

「神的な霊愛はそれ自体最高の霊的な生活の源泉となり、永遠界の底層となり、存在の最も純粋な形態となる

とフリッツ・ヨヒアムも言う。

それゆえに地上の一切の過ぎゆくものは、永遠の実体、実相の映像たるのみである、という。しかし問題はその映像にある。真に実相を映しているならば、それは無常にして無常でない。神の似姿たる、映像たる人間が、真に神の本質を質的にどんなに微少でもそこに具現し得れば、それはいつか天上で円現する約束をもつ。地上で具現、体現するためには、絶対次元界との関係交渉をもたねばならない。それには聖霊が来たり宿らねばならない。しかしそのことはここにはわれていない。地上で未完成なものは、ここでは円現する。名状し難いことも、実力をもってここに成就される。そして「永遠の女性」が我らをどこまでも引き揚げてゆく。「永遠の女性」における永遠の愛！　永遠の男性を真に引きつけるものは、このような永遠の愛を宿す永遠の女性である。ゲーテにとっては幾人かの女性が、非連続の連続の様相において、夫々の色調で「永遠の女性」の化体者として、ゲーテの生涯を導いた。これは生涯を貫いて最も重要な要素で、これなくしてゲーテは考えられない。

この論説のはじめに記したように、ゲーテの母を筆頭に、十指にあまる色調とりどりの女性たちを貫く「永遠の女性」なるものが、ゲーテの魂の形成に重大な役割を果した。ダンテにおいてはベアトリーチェという唯一人の女性が「永遠の女性」としてダンテをその詩的現実において地獄、煉獄、天国の三界を貫いて間接、直接に道しるべした。ゲーテにおいては、人生の諸々の時期を通して、夫々のっぴきならぬ恋人が、入りかわり立ちかわってゲーテの心魂を進展させた。

しかし問題は何に向かって女性は男性をひきあげてゆくのか。そのような役割を果たす女性も、そのように女性において永遠なるものを観て、おのれを鍛えあげてゆく男性も、いずれも純なる女性また真なる男性である。しかしもし女性そのものが目的となれば、それは進展の休止、ゆきづまりを来たす。ひきよせる女性が、ギリシャ的ヘレナであろうと、ゲルマン的グレートヘンであろうと、ゲーテの生涯のどの女性であろうと、ゲーテにとって問題であるのは、つねに真におのがたましいを引きよせ、ひき昇らせる「愛」の権化たる女性が現在していることであり、それでありながら女性自身が単なる手段でも単なる目的でもないという事態である、態勢である。彼の生涯はたしかにそういう性格をもって進展してゆき、人間ゲーテは永遠の男性として進展せしめられた。かかる永遠の女性と永遠の男性の緊張関係、愛の火花が放電しながら進展してゆく関係の成立するのものは、第三のかくされたものがあるからである。その第三のものこそ永遠の神性である。

永遠の女性が永遠の男性を引きあげてゆく先きは、実に愛の本源たる神である。それはもはや聖母マリアではあり得ない。具体的には神を体現したロゴス・キリストであるが、そのことをゲーテは神秘の奥にかくしてわない。晩年のゲーテはキリストにする心をもってはいたが、少なくとも彼のたましいは、キリストにおいて最も完璧に自現した神霊であり霊界の太陽であるところの神に向かって昇らんとの悲願をもっていた。かつて私はゲーテの大詩篇の終句に更に二行を付加して、この大詩人の悲願霊願の存するところを詠ってみた。

 ’

 !

「愛と歓びをもって聖なる太陽ヘ！」

“ ”をもって始まっているこの大詩篇を、太陽を熱愛した彼のため、Zur heiligen Sonne! の一語をもって結ばしめてみた。自然界の太陽にられて誕生した彼は、霊界の「聖なる太陽へ！」神へ！　と「永遠の女性」に導かれて往く。神そのものは飽くまでも絶言絶慮の不可見不可測の霊的実在ではあるが。

ゲーテのゆくりなくも発した臨終の言「もっと光を！」の奥にひびく悲願は何であったか。それはパウロの言、

「キリストの栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、キリストと同質の姿に変貌（メタモルフォーゼ）させられていく。」（第二コリント3･18参照）

に照応する事態であったろう。キリストをこれほどつよくゲーテにもってくることは、勿論ゆきすぎとは思うが、ゲーテがゲーテらしい自由において、神性に向かって限りなく自己を円現せんと悲願したこと、神性を映す映像、永遠の人間たらんと霊願したことは事実である。さればこそ大詩篇の神韻たるフィナーレの数句ある所以である。ゲーテは彼の念願形態の如何にらず、実はイエス的天真の質を本具していた。

［独文省略］（参考文献）

〔『ゲーテ〈ファウスト〉第二部のために』論文集（南江堂）所載、１９６４年〕